保護者・家庭・地域との連携

実践例 12　学校法人柿沼学園　認定こども園こどもむら 栗橋さくら幼稚園・さくらのもり保育園、こどもむら駅前保育園さくらのはな

子育てしやすい地域を目指して、出産前から就学後まで、長期的に支援する

学校法人柿沼学園　認定こども園こどもむら　栗橋さくら幼稚園

施設別●認定こども園
代表者●柿沼平太郎(理事長)、阿佐谷智子(園長)
所在地●埼玉県久喜市
定　員●3歳児60名、4歳児70名、5歳児70名
職員数●園長、副園長、主幹教諭2名、教諭・保育士21名、子育て支援員2名、栄養士1名、養護教諭・看護師1名、事務他9名

学校法人柿沼学園　認定こども園こどもむら　さくらのもり保育園

施設別●認定こども園
代表者●柿沼平太郎(理事長)、長谷洋子(園長)
所在地●埼玉県久喜市
定　員●0歳児6名、1歳児12名、2歳児15名、3歳児17名、4歳児10名、5歳児10名
職員数●園長、副園長、主幹教諭2名、教諭・保育士17名、子育て支援員2名、栄養士1名、養護教諭・看護師1名、事務他8名

学校法人柿沼学園　こどもむら駅前保育園さくらのはな

施設別●保育園
代表者●柿沼平太郎(理事長)、石原静津子(園長)
所在地●埼玉県久喜市
定　員●0歳児3名、1歳児7名、2歳児8名　職員数●園長、保育士5名、栄養士1名、看護師1名

活動の概要

当園の活動における大きな目標は、「子ども・子育て中心の街づくり」です。人口減少問題や少子化問題を抱えた地域においては、子育て支援より以前に〝街に子どもが存在する〟ことが最大の課題となることは言うまでもありません。そこで、当園では子育て支援センターや一時保育、アウトリーチ型支援※1など、様々な子育て支援機能を中心として、地域機能を再構築し、子育てのワンストップサービス※2の提供、子どもが集団として育ち合える環境の確保や子ども子育て関係機関や産業等との協働による地域ネットワークづくりを行い、子どもを産み育てやすく、この街で子育てをしたいと思える環境の提供を目指しています。

※1 アウトリーチ型支援…福祉分野などで、地域社会への奉仕活動、現場に赴いての支援のこと。
※2 ワンストップサービス…1か所で様々なサービスが受けられること。

実践のポイント

- 子育て世代のニーズを掘り起こす活動
- 子どもと親の居場所をつくる
- 出産前から卒園後まで、長期にわたって子育てを支援

実践の展開

1. 街づくり

当園の所在する地域では、20数年前より急速な人口減少が始まり、街の機能も著しく低下していました。そのうえ、出生率は1.03人と、国の出生率（1.41人）を大きく割り込み、子育て世帯を中心とする若年層の減少が止まらず、街の未来に暗い影を落としていました。

このような背景の中、乳幼児数は落ち込み、特に幼稚園は園児確保が最重要課題という状況にありました。しかし、当園では園児確保という目の前の課題に取り組むことよりも、少子化、人口減少といった未来への課題に目を向けた取り組みを行うことが重要だと考えました。

最初の取り組みは、子育て中の保護者のニーズ調査です。子育て中の保護者が何を求め、何に困っているかを調べ、次に、自らの地域と子育てしやすいといわれている地域の子育て機能の比較調査、そして地域資源の調査を行いました。

調査の結果、子育て中の保護者は「街に居場所がない」と感じているケースが多いことに気付かされました。子育ての孤立や引きこもり、虐待、産前産後の精神疾患などの深刻な諸問題も居場所やつながりの喪失から起こり始めるケースが多いという事実も浮かび上がりました。

一方で、子育てに優しい地域で生活する保護者は、家庭以外の居場所があることで、人とのつながりや頼れる存在が生まれ、前向きに子育てができるケースが多いという事実も明らかになりました。

そこで、当園では、地域に欠けている子育て機能の提供を行うことにしました。まずは「居場所」づくりです。子育て支援センターや図書館を建設し、子どもを連れていく場の提供を進めました。

2. 子育て支援事業

幼保連携型認定こども園では、子育て支援の機能が義務付けられ、幼稚園や保育所でも努力義務とされています。子育て支援では、在園児保護者への子育て支援と地域に対する支援の、大きく2つが求められています。本園では、この2つの子育て支援を中心に、子育て支援機能の強化・拡大を行っていますが、今回は地域に対する取り組みをご紹介します。

●地域子育て支援

①子育て支援センター「森のひろば」

地域子育て支援の中心は、子育て支援センター「森のひろば」となります。森のひろばは、子育て中の保護者と子どもの「居場所」として、居心地のよい環境を提供することを心がけています。

また、この施設には子育て図書館「森の

図書館」と子育て公園「あそびの森」が併設され、多機能施設として、毎年1万人以上の方々が利用しています。

森のひろばの活動としては、おはなし会や製作といった親子で参加するものと、子育て講座や栄養士や看護師、センター職員による相談事業といった保護者向けのものがあります。特に保護者向けの事業の充実を図っており、親子で食べられるランチサービスの提供や、お米や野菜、パンなどが購入できる環境も提供しています。また、料理が苦手という保護者の要望に応え、近隣のケーキ屋さんや栄養士による料理教室も行われています。

森の図書館では、乳幼児向けの絵本はもちろんのこと、ファッション誌や趣味の本、料理本など、子育て中の保護者が足を運び、一息つけるような環境を提供したいと考えています。

②アウトリーチ型子育て支援

子育て支援センターの運営から見えてきた課題は、アウトリーチ型子育て支援の必要性です。地域には子育て支援センターや一時保育、子育て相談などにも出ていけず、家庭の中で孤立している可能性が高い保護者が存在します。もちろん、そのようなケースは行政機関との連携が必要不可欠ですが、私たちとしてそのような保護者に対し、少しでも役に立つことができないかと検討し、始めた事業が「ホームスタート久喜@こどもむら」です。

「ホームスタート」とは、子育て家庭に研修を受けた子育て経験者が訪問する家庭訪問型子育て支援ボランティアです。週に1

"こどもむら" を中心とした子ども・子育て中心の街づくり イメージ。

地域の子育て支援の中心となる、子育て支援センター「森のひろば」。

「あそびの森」では思い切り体を動かして遊べる。

「森のひろば」に併設された「森の図書館」。

度2時間程度、定期的に友人のような関係で話を聴くなど、一緒に子育て（育児、家事、遊びや病院などへの外出の付き添いなどの活動）を行います。子育て中の親子と共に生活をすることで、保護者の心を支えると共に、地域の子育て支援や人々とつながるきっかけづくりも行います。

「ホームスタート久喜@こどもむら」では、市の担当課や保健センター、社会福祉士、地域の専門家などとの連携のもと、社会から見えにくい隙間への対応を行っています。

③出張図書館

出張型の支援として、出張図書館という事業があります。地域の行政機関や医療機関へ出張して本（30冊程度のセット）を届けるという活動です。現在6つの施設が利用してくれています。

子どもを連れて医療機関などを利用する際に困るのが、待ち時間の過ごし方です。通い慣れた待合室には同じ本しかない、破損している、何もないのでスマホを渡して遊ばせる、といったこともあると思います。また、施設としてもそこまで手がまわらないという状況もあるでしょう。

そこで、「絵や図書館の本をセットにして届けてあげたら」という発想から活動が生まれました。利用者が「森のひろば」や「森の図書館」の存在を知る機会となることや、

親子でゆっくり食事ができるランチサービスは大人気。

孤立しがちな子育てをサポートする、ホームスタートのビジター養成講座。

「森のひろば」の一角では新鮮野菜の販売も行われている。

気軽に利用できるカフェで、産前からのサポートも計画中。

家庭的な雰囲気で過ごせる学童保育。卒園後の居場所づくりは喫緊の課題。

何よりも医療機関など、ネットワークがつながりにくい施設と本を通してつながるというメリットが隠れています。利用者からは喜ばれているとの声も届き、異なる角度からの社会貢献を感じています。

④産前産後の子育て支援

子育て支援は、産後からの支援では遅いと感じています。なぜなら、出産し、退院するとすぐに一人で子育てに向き合うケースも多く、相談する、外出する、支援を受ける余裕すらないというのが現実となっているからです。

そこで、本園では産前からの子育て支援を徐々に増やしています。赤ちゃんがおなかの中にいるうちに支援センターや園の存在を知ってもらい、そのためのメニューを増やしていくという取り組みです。具体的には、産婦人科医の協力のもと、助産師による講座や座談会、マタニティ図書コーナーの設置などを行っています。

しかし、産前から支援センターを利用するにはハードルが高いため、今後は、カフェを利用した産前産後ケアを計画しています。カフェで産前産後向けのサービスの提供や妊婦さん向けのワークショップを行うなど、本園の機能を利用した子育て支援の提供により、切れ目のない子育て支援を生み出していこうと考えています。

⑤放課後の子育て支援

放課後の子育て支援も本園の最重要課題となっています。児童を狙った犯罪の増加や犯罪の低年齢化が進む中、私たちは放課後の子育てに対しても取り組むことにしました。

平成28年には私設学童保育を開始し、平成29年には市の委託事業としての学童保育「en-college」を開設しました。私設学童保育「encourage」も保育要件を満たさない家庭のために継続しています。さらに、放課後の子どもたちの居場所として「駄菓子屋むすび堂」が開店します。家に誰もいない、家庭環境に問題を抱える子どもたちの街の居場所になればと考えています。

私たちの仕事は、子どもの在園期間中だけでは終わりません。子どもたちの生きる力を育てると共に、安心安全を提供する責務があると考えています。この地域の未来を育む子どもたちが人とつながり、地域の大人に守られ、安心して成長していける場であればと願っています。

●一時保育

一時保育事業は、現在最も大切な事業のひとつだと認識しています。多様化する家庭環境での子育てには、保育を必要とする家庭だけでなく、子どもを預けなくてはならないケースや預かる必要があるケースが存在します。

言うまでもなく子育ての第一義的責任は親にありますが、子どもと向き合いたくてもできないときもありますし、保護者が体調を崩すこともあります。少し子育てに行き詰まったときに、頼れる場所としての一時保育は大きな存在意義をもちます。

もちろん、そこには保育者の専門性が必要になります。預けた際に、子どもの成長や発達を伝えることは重要ですし、保護者の悩みを聞くことも大切な支援だと考えています。そこで保護者との関係性を築き、安心感をもってもらうことで、入園につながるケースも少なくありません。

毎日異なる人数と年齢の子どもの様子、家庭の様子に対応するための職員配置やカンファレンス、担当職員の経験も重要な要素となっています。一時保育といっても、通常の保育同様、家庭状況調査やアレルギー相談などをきちんと行い、保護者としっかりと面談し、登録してもらってからの保育となります。一時保育は急を要する場合もあるので、手続きの煩雑さが課題ではありますが、子どもの命を守るためには必要な時間と考えています。

成果と課題

今回ご紹介した活動は、まだ発展途上です。しかし、ふり返ってみると、平成24年に子育て支援センター「森のひろば」を設立し、意識的に子育て支援に取り組んでいったことの成果が徐々に出てきたようにも感じます。

子育て支援に特化して取り組み始めた当初は、一方的な子育て支援だったように感じますが、それでも当園に通う子どもや保護者だけでなく、地域の子育て家庭を支援できたことは大きな一歩であったと思います。

そして、かかわる子どもや家庭が多様になると、次の課題が見えてきました。それがホームスタートや産前産後ケアの取り組みへとつながっていきました。自分たちだけの考えでなく、社会の要請する支援に移り変わっていったと言えるかもしれません。すると、今までつながらなかった関係機関との連携が一気にとれるようになったのです。

深刻なケースも行政機関と一緒に考えることができますし、こちらから情報提供を図れるようにもなりました。こうしたネットワーク構築は最大の成果であり、地域で育つ子どもや家庭にとって、緊急事態が発生した際のセーフティーネットになる可能性もあると思います。

子育て支援を通して、保護者や家庭、地域とつながる。そして、地域と一緒にこれから迎える人口減少社会と対峙する準備をする必要があります。親の就労や家庭環境で、地域の子どもを分断する時代は終わったと言えます。これからは、地域の子どもは地域で育てることはもちろんのこと、私たち保育関係者の役割にも変化が求められる時代となったと感じています。自分の園の子ども・子育てだけでなく、地域の子ども・子育てをどれだけ担えるかが課題の時代へと移り変わりました。

人口減少問題や少子化問題は、国家レベルの最重要課題です。この国の未来のためにも、また公益法人として教育・児童福祉事業の担い手として存在し続けるためにも、今後よりパブリックな存在として新しい道を開かなくてはならないと思っています。

執筆／柿沼平太郎

学校法人柿沼学園理事長・学園長（認定こども園こどもむら第携さくら幼稚園、さくらのもり保育園、こどもむら新所保育園さくらのはな、子育て支援センター森のひろば、森の図書館、こどもむら学童保育「en-college」理事長）。京都市子ども・子育て会議委員、京都府子育て支援審議会専門委員、久御山町児童福祉審議会委員などを歴任。認定こども園政策研究会事務局長、全国認定こども園協会関東地区会事務局長、株式会社アケボノ・en-cafe・むすび全代表。

◀第５章▶

職員の専門性